

MONSTAR HUNTER
METEOR

メテオ 9729

モンスターハンターの世界を描いた小説

ハンター駆け出しのコウキ、シヨウ、カエデとこの三人が慕っているクアンタの4人編成パーティで活動をしているハンターの物語。

世界には数多の種のモンスターが存在し、それを追う狩人、コウキの笑えるハンターライフを楽しんでください。

目次

プロローグ	1
プロローグ	1
ハンターライフ始まり	7
雷狼竜	7

プロローグ

プロローグ

大地を、大洋を、そして大空を、数多のモンスター達が翔けている世界。

ケルビやガーグアの様に、戦闘を嫌うモンスターも居るが、ジャギイ等の様に好戦的なモンスターが居るのもまた事実。

緑生い茂る森に穏やかな川が流れた豊かな自然の溪流があれば、砂に埋もれ、木々は枯れ果てた砂原もある。

そして砂原とは正反対の土地、水気が多く、土地のほとんどが川に沈んだ水没林。マグマが溢れ出ており、異様なほど暑い。否、熱い火山に、雪が吹き荒れる極寒の地、凍土。

人類は、その強大な自然と共存し、そして立ち向かうために知恵を絞り、腕を振るうものたちを狩人^{ハンター}と呼んだ。

これらの大自然に囲まれ、巷では温泉地としても有名な村、ユクモ村にも狩人呼ハンターばれる者たちは存在する。

——グオオオオオオオオツツ三三

満月の星が輝く夜。

一匹の狼が高らかに雄叫びを上げた。

刹那、森に稲妻が走り、数多の雷光虫が特殊な電撃を帯びる。

月の光と小さな命が生み出す光が、その“狼”の姿を顕あらわにした。

強靱な発達を遂げている四肢に、鋼の様な甲殻は鋭く立ち上がる。

鮮やかな蒼い皮膚を持ち、額には一本の角。

その狼は闇夜に明かりを灯すかの様に、自身に電撃を纏った。

バチバチと音を立てて走る稲妻、それを纏ったその姿はまさしく雷狼竜。

電撃の光と月の光がその狼の表情を曝け出した。

「おい！ コウキ、ショウ、カエデ！ 準備はもう良いか！」

俺はこの言葉で我に返った。

呼びかけた彼女はクアンタさん。見た目こそ女性だが、その性格は男勝りでサバサバとしている。

狩人の腕は確かで、ハンターランクは三で俺たちより二つも上である。

ハンターにもランクがあり、大きく分ければ上位と下位。

細かく言えば、ハンターランクは六までであり、三までは下位、四からは晴れて上位と認められる。

特定のクエストを受注する事により、緊急クエストと言う昇格試験の様なクエストを受けることが出来るようになる。

そのクエストを達成した時、晴れてハンターランクが一つ上がるのだ。

だが、そんな事は今ハッキリ言っても良い。部屋に埃が舞っているくらいにどうでも良かった。

俺たちはドスファングの討伐クエストを受注してやってきている。その筈だっ

た。

しかし、目標のモンスター^{ドスファング}を狩り終えた後、突然耳に響いたなぞの咆哮、そしてギルドからの報告。

どうやらエリアに別モンスターが乱入したとの事らしい。

俺はクアンタさんが居る事で安心しきっており、そして新たなモンスターを狩れば、さらに報酬が貰える^{と聞き、そのクエストを引き受けた。}

そのモンスターがまさかジンオウガだとは思っていなかった。あのときの浅はかな考えだった自分自身に腹が立つ。

ジンオウガとは別名雷狼竜、雷を纏いし巨大な狼。最近、この溪流で良く見るようになったモンスターである。

その性格は凶暴で、視界に入った者へなりふり構わず襲い掛かる。俺の村でもその被害は何件も聞いていた。

いくらハンターランクが上で、実力が確かなクアンタさんでも、ハッキリ言って俺は不安で仕方がない。

だが、クアンタさんと呼びかけられた俺は返事をして、背中にかけた武器、ハン

マーを構えた。

ファンゴの素材を使ったブルハンマーだが、本当にこの武器はあのジンオウガに効くのだろうか。

そんな疑問を感じながらも、唯一のガンナーであるショウはジンオウガから距離をとり、ボウガンを構える。

気がつけば、カエデも巨大な刀、太刀を握り締めていた。きれいな顔立ちも今はハンターとしての顔つきをしている。

ちなみに俺はハンターの顔つきなんて分からんが、まあとにかくそう言う顔つきっぽい。

俺とカエデはクアンタさんの横に並び、巨大な狼に睨みを利かす。

ショウが撃った銃弾がジンオウガと俺たちの戦いの火蓋を切った。

突然の攻撃に怯んだその雷狼竜を見て、

「行くぞ！」

クアンタさんの掛け声で俺たちはジンオウガ向けて駆け出した。

読んでくださり、ありがとうございます。

作者のメテオです。

モンスターハンターが好きで、小説を書いてみようと思い立ったので書いてみることにしました。

よろしくお願いします。

ハンターライフ始まり

雷狼竜

眩しく照りつける光で俺は目を覚ました。

青く、薄らと雲がかった空を視界に捕え、ゆっくりと体を起こす。

どうやらシヨウとカエデは意識を失っているらしい。

クアンタさんは腕を組み、目を瞑っている。眠っているのだろうか。

ガーグアがひくこの荷車から考えるに、どうやらクエストを終え、村へ向かって
いるらしい。

俺は朦朧とする頭で懸命に何があったのか、記憶の糸を手繰り寄せた。

ジンオウガへ向かっていった俺たちは、基本的な陣形になった。

ハンマーの俺とクアンタ姉さんは比較的前方、ハンマーの基本的な目的である^{スタン}気絶や頭部破壊を行いやすくする為だ。

俺たちに対し、カエデは雷狼竜の背後へ。

各々の役割を最も生かすと思われる陣形で俺たちはジンオウガを囲んだ。
しばし、この状態で静止。

隙が……ねえ……。

暗闇で輝く稲妻、^{ほとばし}迸る電撃。巨大な肉体とその巨体を支える強靱な四肢。

そして何より、嫌でも感じる異様な程の威圧感。

とてつもない圧力……。立っているのがやとなくらいだ。

ごめん、それは言い過ぎた。動けるっちゃあ動ける。

とにかく、俺は少し緊張し、ハンマーをもう一度握りなおした。

刹那、俺の横を駆け抜ける一人の女性。

その後ろ姿はよく知っている。クアンタ姉さんだ。

クアンタ姉さんが振り上げたハンマーが、雷狼竜の頭部を捕えた。

反動に負けるように、雷狼竜の顔が跳ね上がる。

俺はその隙を見逃さず、一気に畳み掛けた。

跳ね上がった顔へもう一度ハンマーを振るい、背後ではカエデが巨大な刀で尾へ一太刀浴びせた。

尾の肉が削がれ、血しぶきが舞う。

クアンタ姉さんがハンマーを地を抉りながら振り上げる。

そのハンマーは見事に腹部を捕えた。……俺の。

「ぐ……ぐふっ!!」

呻き声を漏らして宙を舞った俺は、雷狼竜から十分に距離をとったところで勢いを無くし、頭から落ちた。

……痛いです。

涙を流しながら、俺は起き上がり、ジンオウガの方へ視線を向けた。

俺のいた地面が抉れている。

クアンタ姉さんが俺の事を救ってくれたのだ。

実際、モンスターの攻撃に耐えるために作られた装備の上から殴られても、痛み

はほとんど感じない。

まあ、頭から落ちた時は首が折れるかと思ったけどな。

そのクアンタ姉さんが俺に向かって指示を出した。

「おいコウキ！ 落とし穴仕掛けろ。こいつ落とすぞ！」

「了解！」

アイテムポーチから取り出したのは、ネットが小さく折り畳まれた小さな袋。

地面を少し掘り、俺はその袋を埋める。

ちなみに、落とし穴の仕組みはこうだ。

袋を埋めた地面からネットが噴出し、ネットは空中で広がり、地面に付着する。

このネットに湿らせた薬物が地面に触れると同時に化学変化を起こし、土が溶け、その溶けた地面にモンスターが触れる事によってその重さで地面が沈むと言うものだった。

俺は埋め終え、様子を見るためにジンオウガを見た……。

一目散にこっちへ向かってきている。

うん、終わった。一瞬でそう思った。

必死に後ろを追うクアンタ姉さんとカエデの姿が見えるが、雷狼竜の速度には敵わない。

しかも、まだ落とし穴は完成していない。俺は動くに動けず、気がつけば激痛と同時に体は宙に浮いていた……。

強烈な痛みに意識も朦朧とする。最後、視界に捕えたのは雄叫びを上げる雷狼竜と、今になって噴出した落とし穴のネットだった。

MONSTAR HUNTER ME TEOR

著者 メテオ9729

発行日 2020 年 6 月 21 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/1547/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。